
carvaly

新兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

caraval

【NZコード】

N6813X

【作者名】

新兎

【あらすじ】

人形ドールとそれに関わる人たちの連作風短編です。ブログからのお引越し。

「これば……また派手にやったわね」

田の前に置かれたスクランプを見ながら呟れたように彼女が言つた。

「別にいいじゃん。どうみち壊すんだし」

肩から垂つたライフルを持て余しながり駆け。

「ウーノの持つてくるロボットの照合が、どうして私に回されるか分かる？」

「さあ？ なんでなのケイちゃん」

聞ひと、彼女 ケイは一呼吸置くと静かに続けた。

「こんな壊し方するヤツは頭がぶつ飛んでる。
こつこつちに向かつてライフルをぶつ放すか分からなつてや」

言われて、あたしは笑つた。

「そのぶつ飛んだヤツがあんたたちの仕事の手伝いをしてくるんだ
けどね」

「ま、おかげでこつちは楽できるわ。ありがたいことで」

ケイちゃんはもう三つ四つと笑つと、スクランプの確認を始めた。

身の回りにロボットがいる生活が当たり前になつてから彼女たち
警察の仕事は1つ増えた。

新しい型が出る度に買い換えられ捨てられるロボット。

ロボットの処理場は存在していたがそれは大した意味をなさず、街の至るところで違法廃棄されたロボットが転がつた。その中にはまだ自律的に動くことができるロボットも少なくはなかつた。

そういうた違法廃棄ロボットの管理担当は、本来ならば警察機構の役割だったが、ロボット以上に厄介な、人間という種族を相手にしている当の警察にそんなくだらないことをする余裕はなく、いつのまにか警察の代わりに違法廃棄されたロボットをスクラップにして届ける壊し屋という職業がうまれた。

それが今のがたしの仕事といつやつだ。

「よし、確認とれたわよ。報酬はいつも同じ座でいいのよね？」

「うん、よろしく」

いつも通りのやり取り。書類にサインをして本田の仕事終了。ケイちゃんにサイン済みの書類を渡す。

「ほい、お疲れ様　あ、そういうえばウーノにひょっと頼みがあつたんだけど」

「頼み？　ケイちゃんがあたしに？」

「ロボットの搜索なんだけね。どうする？」

壊し屋の副業としてロボットの搜索を頼まれることはよくあることで、あたしは大抵断つたことがない。だから、どうして彼女が念を押すようにそういうのが少し引っかかった。

「搜索でしょ、やるよ」
「じゃあ、これ資料」

ケイちゃんはあたしから受け取つた書類をしまうと、デスクからファイリングされた資料を取り出す。かなり分厚い。

資料を受け取る=仕事を引き受けること。あたしは、その分厚さにうんざりしながらそれを受け取つた。

この街の区画を上・中・下の3つに分けるとすると、あたしの住んでいる場所は最悪なまでに中途半端な中ランクにあたる。それをおさらに細かく3つに分類しても、また中ランクだから救いようがない。

かといって、あたしがこの場所を気にいっていいかといえば決してそうではない。

この区画は人口が爆発的に増えたこの星でもっとも人口密度が低いらしい。

人間は中途半端なものを嫌うといったところだろうか。おかげでこの区画は単純に他人と接するのが苦手な人間が好んで住むようになった。

つまり、仕事以外で他人と関わりを持ちたくない、中途半端に生を消費するあたしには、もっとも好都合な場所だつたのだ。

街中に張り巡らされた自動走路オートロードに乘つて家路につく。その途中であたしは仕事用の銃弾を買い忘れていたことに気づいた。

一旦、自動走路から降り、ジャンクシティに向かう走路に乗り換える。

ジャンクシティには、鉄くずの集まりのような雑然とした建造物が立ち並んでいる。いつ来てもそこだけ別世界のような印象を与える場所だ。

あまり長居する気もなかつたのであたしはさっさと銃器屋へ足を運び、目当ての物を買い揃え足早に走路乗り場に引き返した。

途中、ふと安っぽいライトに照らし出された中古の**人形屋**の看板が目に留まった。

ショーウィンドウには、主に捨てられたたくさんの**人形**たちが立ち並んでいる。

人形とは、擬似恋愛用のためにつくられた**ロボット**のことだ。こういう物を見るたびにつづく人間の欲望とはすうごいと思わされる。

最新型よりも少しだけ型の古い**人形**たちが、あたしの視線を感じしたのか、一斉に顔をこちらに向け、まるで街娼がするような媚びた笑顔をつくった。

基礎プログラム通りの行動だが、それはまるで誰かに買つてもらわねば自分たちはスクラップにされることを知っているかのように見えた。

普段なら湧き上がる嫌悪感からそのまま素通りをするはずなのに、なぜかあたしの足はその場でぴたりと止まった。

たくさんの笑顔の中に1つだけ妙に不自然な笑顔があることに気づいたからだ。

その笑顔を浮かべた**人形**の型はあまり巷で見かけたことのないタイプのものだつた。

もつとも、あたしはそれほど**人形**の世界に詳しくないけれど。

10代の少女のボディ、スラリとしている割に、頬には弾力が感じられ、その製作にはかなりの金がかかっていることが窺えた。

なにがどう不自然なのかあたしはまじまじと、その人形を見やる。そして、分かった。その人形が浮かべている笑顔は人間が浮かべるものとしてあまりに自然で、それゆえに**人形**が浮かべるものとしては不自然極まりなかつたのだ。

ショーウィンドウの前で一人難しい顔をしていると、変わらず笑

顔を続ける人形たちの中で、その人形だけがあたしに向かって、まるで昔のアイドルみたいにひらひらと手を振ってきた。挑発するか

のようなその行為になぜか無性にムカつきを覚える。

それで つけなくてもいい踏ん切りがついたというか、あたしは衝動に身を任せて、一生開けることはないだろうと思つていた人形屋の扉を開け、その人形を即金で買つていた。

まったく自分で自分が信じられない。

業者に頼めば運搬してくれたらしいけれど、見知らぬ他人に自分の住所を教えたくはない

そんなつまらない意地を張つたことを後悔しながら、人形の入つたボックスを手に歩くこと數十分。後悔が最高潮に達した頃にあたしはようやく部屋にたどり着いた。

部屋の適当な場所にボックスを置くと、これでもかというほどわかりやすい位置にある開閉ボタンを押す。

わずかな駆動音。ボックスがゆっくり開く。

ボックスの中で眠りにつく人形の姿はショーウィンドウに飾られていた時と何ら変わりのない姿だ。

ボックスが完全に開くと同時に起動キーが入るよつになつていたのか、眠っていた人形が静かに目覚める。

そして、あたしと視線が合うと、ショーウィンドウで見た笑顔そのままに、その人形は微笑を浮かべた。

「起動ナンバーの登録をお願いします」

「ドールのフリはしなくていいよ」

「起動ナンバーの登録をお願いします」

人形は無表情であたしの言葉を無視すると、もう一度そう繰り返した。

面倒くさい。あたしは、腰に挟んでいたハンドガンを構えるとドールの額に狙いを定めた。

「見て分かると思つけど、一瞬で頭吹き飛ぶよ」

人形は慌てることなく向けられている銃口を凝視する。この時点で、普通の人形じゃないことが分かる。

「あちやー、壊し屋さんでしたか。これはまた難儀な職業の人買われちゃいましたね、私」

人形は本当にまいつたなーと言つぱうに頭に手をやつた。

「あたしの職業よく分かつたね」

「そんな大仰な銃を持つてる人間なんて、壊し屋さん以外に考えられませんからね」

確かにそうだ。こんなものを持ち歩く者といえば壊し屋しかいな
い。

「でも、普通のドールにそんな判別はできないはずだけど?」

「確かにそうかもしませんね」

「あんた、いつたい何者?」

「んー、そうですね。知識が豊富な天才ドールってことで納得して
いただけますか?」

笑顔を微妙に崩し そうするとさうに人間へへくなる ドードルは言った。

「無理だね」

あたしは、銃口を向けたまま言つ。人形^{ドール}が肩を竦める。

「それではどうしたら納得してくれますか?」

「あんたが何者かちゃんと話せば納得するかもよ」

あたしの言葉^{ドール}に人形は小さく嘆息した。

どこからどこまで人間に似せて作られているんだか。呆れてしまふ。

「さうですねえ、簡単にいうと私は違法廃棄口ボットですかね」

日常では滅多に聞くことのない、あたしら壊し屋^{ドール}にとつては聞き慣れた単語を人形はさらつと口にした。

「実は私、ある目的で造られたんですけど、ある事件が起きてしまいました、そのまま廃棄処分になるところを自力で脱走したんです。その後はまさに波乱万丈でしたよ。まあ、なんだかんだめげずに色々な困難を乗り越えてきた結果、今は生命の危機に立たされていますね」

「ある目的とかある事件ってのはなに?」

「それは、言えません」

「……じゃあ、あのショップでドールになりましたワケは?」

あたしは他の質問をぶつけてみる。

「なにはなくとも住人IDがなくては身動きが取りにくいですからね。買われた先のマスターを殺して住人IDを奪おうかと考えていました」

あつさりと言ひ。つまり、あたしを殺そうと考えてたわけか。あつけらかんとした態度にムツとしたが、それで分かったこともあります。

【人間には逆らわない、殺さない、傷つけない】
【主人^{マスター}の意思には逆らわない】

【自ら消滅しない】

ロボットがロボットたる3原則。けれど、このドールにはそのプログラムが組み込まれていない。つまり、その気になれば、こいつは人間を殺すことが出来るつてわけだ。

一体、どんな目的で作られたのか気になつたが、どうせ口を割らないだろ？

「そろそろ撃つていい？」

「ダメですよ。大体、私を壊してもスクラップリストには登録されてないんですから、あなたにはなんのメリットもありませんよ」

「あんたに殺されなくなるつてのがあたしのメリットだと思つけど」

「そのことなういじ[女心くださー]」

「董つと、人形はいやに親しげな笑顔を造つた。

「あなたを殺すのはやめました」
「はあ！？」

「だつて、この状態から攻撃しても、私のほうが完璧に分が悪いですしそれにあなたみたいなクレイジーな人間に興味が出てきました。このままあなたの所有物になつてしまはらく様子を見ることにします」

突然の申し出にこらちが状況を理解する間も置かず、人形はあたしの手を友好の証ともいうように握った。

そして、思い出したように、「そうそう、私にはパルシアルという立派な名前がありますのであんたというのはやめてくださいね」と言った。

あたしの毎日は単調な繰り返しだった。朝、目を覚ますとスクラップリストをチェックしに壊し屋ギルドに向かい、昼は適当に食事を取り、夕方になるとリストの中から選んだ違法廃棄ロボットを探しに行く。

壊し屋の報酬は、普通の職業よりも高い。だから、そう毎日仕事をする必要も本当はなかったのだけれど、あたしは毎日変わらず仕事をしていた。

仕事をして帰つてくる頃には、ぐつたりしてなにも考えずに眠ることができたからだ。

あたしは今まで、できるだけ意識してなにも考えないようになっていた。

そして、これからもずっとそうしていくつもりだった。

なのに、パルシアルの存在は、あたしが今まで築き上げてきた、そんなわざやかな日常性を揺らがせはじめていた。

「ウーノさんに質問です」

「……なに？」

「IJのロボットはどうして人を殺すのでしょうか？」

パルシアルは、あたしの前に置かれた資料を手にとつて言つた。この間、ケイちゃんにもらつたものだ。

資料を読んだ時、あたしはその予想外の内容に愕然とした。彼女からは、単にロボットの搜索としか聞いていなかつたからだ。

それは完璧にあたしの思い込みだつたようで、搜索は搜索でもそのロボットの前には「殺人」という物騒なおまけがついていた。殺人口ボットの搜索なんて聞いていたら、あたしは絶対に資料を

受け取らなかつただる。

ケイちゃんにというよつも、いつもの簡単な仕事だと勝手に思い込んでいた自身の馬鹿さ加減にムカついた。

しかし、引き受けてしまった以上はどうもつもなうので、あたしは、渋々、その殺人口ボットの情報集めに乗り出したわけだ。

「ロボットのことなんてわかるかよ。単にそういうプログラミングされてるだけじょ。つづーか、お前だつて人殺せるくせに」

殺人口ボットを製作したAmokという研究所はもう潰れてしまい、上手にこと情報が集まらなくなつてゐる。

時間だけが無駄に過ぎていく、その苛立ちもあつて、ついきつい言葉で返してしまつたあたしを、パルシアルがしょんぼりとした目で見つめていた。

「言ひ過ぎたこと気づく。ここつたへつ当たりするなんて最悪だ。

「パル……」
「ウーノさん」
「は？」

咄嗟に謝るうとしたあたしより先に、パルシアルが口を開く。

「お前とこいつのはやめてくださいね。私にはパルシアルといつ立派な名前があるんですから」「そつちかよ」「はい？ なにがですか？」「なんでもない。つか、長すぎなんだよ、お前の名前」「でも、これ以上ないくらいいい名前でしょ？」
「パルでいいだろ、パルで」

「……するはダメです」

パルシアルはきつぱりと言ひ。

あたしは深く嘆息した。ここにと話していると疲れる。

「ウーノさん」

「なんだよ?」

「もう一つ質問なんですが、人が人を殺すのはなぜでしょう?」

「は?」

あたしがパルシアルを見ると、パルシアルはにっこりとした笑顔を口元に浮かべていた。胡散臭い笑顔だ。

「ロボットが人を殺すのはプログラムなんですよね。では、人が人を殺すのはどうしてでしょう?」

なおも質問を繰り返すパルシアル。

なにも知らないはずなのに嫌なところをついてくる。あたしはパルシアルから目を逸らす。

「……人間には感情があるからじゃないの」

「まったく無関係の人間を殺すときもそうなんですかねえ」

パルシアルはあたしの心中を知つてか知らずかそう付け加えた。これ以上、話をしたくなくて、あたしは乱暴に立ち上がる。

「どこに行くんですか?」

「警察署」

投げやり気味に返して玄関に向かうと、背後で小さな嘆息が聞こ

えた。

人が傍にいてもいなくとも人と同じような行為をする。パルシアルには、あたしが及びもつかないような技術が搭載されているようだ。

本当に一体なんの目的で作られた」とやう

改めて彼女の胡散臭さを確認しながら、あたしは外に出た。

「あー、やつと来たわね」

あたしの姿を認めると、ケイちゃんは待っていたとでもこいつよつに言つた。

「どひいつ意味？」

「搜索の件、断りにきたんじやないの」

意外そこにケイちゃんは言ひ。騙すよつた形で仕事を引き受けさせて少しほは悪こと思つてこたらしこ。

「まさか。ちやんと探ししてるよ。ただもうひとつと情報がないか聞きに来ただけ」

「へえー。つてこいつか、なんでライフル持つてるの？」

「え？ ああ、出かける時の单なる癖」

「危ないヤツね」

ケイちゃんは、やうごうて肩を揺りすと「少し待つて」と席を立つた。

しばらくして戻ってきた彼女の手にはA4サイズの茶色い紙封筒。

「最新情報」

ケイちゃんは、スッとそれを差し出す。

しかし、封筒の隅に微かに残っていた日付は、あたしがケイちゃんから依頼を受ける数日前になつていて、どうやら情報を出し惜しみしてたらしい。

「最初からくれればいいのに」

受け取りながらケイちゃんを軽く睨む。

ケイちゃんは困ったように「引き受けたかどうか分かんかったからを」と田を逸らした。

「少しは信用してよね」

まあ、警察にもいろいろと事情があるんだらうなづ。あたしは苦笑しながら、封筒から資料をとりだして、一応の確認をする。

前回もらったものよりも詳細な情報。細かくは家に帰つて見ればいい。あたしは、資料を封筒に戻し、バッグにしまう。

「ところでやー」

「ん?」

「あんた、壊し屋以外の仕事する気ない?」

「はあ? なにいきなり?」

突然、ワケの分からない」とを叫こだしたケイちゃんに、思わず胡散臭げな視線を投げる。

「いや、今度さ、新部署が設立するんだけど、ひょっとこひょとこあつて、銃器の扱いに長けてる人をスカウトしておこしてくれつて上から頼まれたのよ」

「へえ、どんな仕事？」

「簡単に言うとUAPみたいなもんかしら。ウーノなら銃器の扱いも慣れてるし、適任かなと思って。まあ、毎回、命張ってる壊し屋よりは多少収入は落ちるかもしれないけど、少なくとも安全だし安定してるし、悪い話じやないわよ」

「安全、安定か。あたしはそんなもの望んじやしない。

「悪いけどいいよ
「やつぱつ」

ケイちゃんは、あつあつとした声でいった。

「絶対、断わられるつて思つてたのよね」

「なにそれ」

「なんかウーノつてや、死ぬために壊し屋やつてるみたいなどあるでしょ」

意識したわけではないが、ケイちゃんの言葉に田つきが悪くなるのが自覚できた。ライフルを無意識に握る。

「……どつこつ意味？」

「特別、お金に困つてるわけでもないのに、今回みたいな危ない仕事を引き受けたし、稼いだお金はほとんど使わないで死んだ妹さん

の口座に振り込んでるでしょ。ああ、これはまともに人生送るつもりないんだなって誰だつて分かるわよ

「……妹は死んだんじやなくて行方不明なだけだよ」

「まあ、どっちでもいいけど。ウーノの人生設計にケチつける気なんてさらさらないし」

あたしの言葉にケイちゃんは、同情とも憐れみとれるなんとも形容しがたい表情をうかべた。

家につくと丁度、玄関から配達業者と思われる服装の男が数人でてくるところだった。

どうこうことだ?

あたしは不審に思いながら、部屋に入る。瞬間「..なにこれ?」とぽかんと口を開けていた。家を出たときにはなかつた大きなベッドが部屋の半分を占領していたのだ。

「あ、ウーノさんお帰りなさい」

隣の部屋にいたらしいパルシアルが、ひょっこりと顔を出す。

「なにこれ?」

あたしは、同じ疑問を繰り返した。パルシアルは大きな目をキラキラと輝かせて

「見ての通りベッドですよ。すじいでしょ」

「すごい？ あー、確かにすじこね。こんなおつきこベッドはじめ
てみたよ」

「でしょ。ふつかふつかの超高級ベッドなんですよ」

嫌味だつたのに嬉しそうに頷くパルシアル。

「で、こんなもの誰が使うの？」

あたしが尋ねると、パルシアルは分かつてくせにとこうこうて
笑い「もちろん、わたしですよ」と胸を張つた。

「あんたにはボックスがあるでしょ」

「あれ、狭いし固いし、おちおち寝てられなかつたんですね」

「スリープモードに入れば、なんもん関係ないでしょ」

言外にロボットの癖にといふ含みを持たせながら言つて、パルシ
アルはチツチツチと指を横に振り「甘く見られては困りますね。私
はスリープモードでもちゃんと体感機能が生きてるんですよ。これ
だから、情緒のない人は」と、やれやれと言う風に首を振つた。
まったくこいつは人を苛つかせる天才だ。あたしは、内心を悟ら
れないように、部屋の隅においやられてるPCデスクに腰掛ける。

「情緒がなくてけつこい。つていうか、だいたいお前、そんな金ど
こに持つてたわけ？」

「ウーノさんの口座にありました」

「はあ！？ お前、あたしの金勝手に使つたのかよ！」

「はい。ちょっとウーノさんの口座を調べてみたら使いもしないお

金がたくさんあつたものですから。使ってもらえないお金ほど可哀相なものはないですよ。いつなにがある時代か分かんないですから使える時にしつかり使っておかないと

「悪びれた様子のないパルシアルに、頭が痛くなる錯覚を覚えてため息をつく。こいつと暮らしだしてからこんなことばかりだ。

「なんだかお疲れのようですね。お風呂で背中でも流してあげましょうか」

「キシヨイこと言つたな、アホ」

「心外ですね。ドールには標準的に搭載されているプログラムらしいですよ、このキシヨイこと」

「……あんたはドールじゃないでしょ」

「まあ、そうですけど。ドールになります時に、一応の基本データはインストールしてあるんですよ。三原則は邪魔なんで省きましたけど」

「だから、お背中流しましょうか？ マスター」とパルシアルはお風呂場を指差してワインクをした。こんな仕草一つとっても人間らしそぎて本当にムカつく。

あたしは、肩に掛けっぱなしにしていたライフルを構える。

「マジで壊すよ」

「そ、それは勘弁して欲しいですね」

パルシアルは、両手を上げて困ったように微笑をつくる。まったく、大した機能だ。これ以上、話をしていても疲れるだけだ。あたしはパルシアルを相手にするのをやめると、ライフルを下におろしPCの電源を入れた。

さつきもらつた情報をまとめてこいつ。

「それ、新しい情報ですか？」

いつのまにか隣に立っていたパルシアルが、もうつてきたばかりの資料を素早く手に取る。

「邪魔すんなよ」

「いいじゃないですか。私も協力しますよ」

「お前のいう協力ってのは邪魔するつてことでしょう」

「あー、またお前って言いましたね。何度も言いますけど

「うつさいなー。それ、返せって」

あたしは、パルシアルの手から資料をもぎ取る。

「まだ見てないんですよー。横暴はんたーい」

「ぶーぶーと文句を言うパルシアルを適当にあしらいながら、あたしは資料に目を通していく。

警察署でチラッと確認した時にも思ったが、予想以上に詳細な情報だ。これでどうして見つからないのかが分からぬ。

資料から読み取る限り、Amokが製作していたロボットは軍事用のものだつたらしい。

しかし、なんらかのプログラム異常が発生し、ロボットはその場にいた研究所員を殺して脱走。なし崩し的にAmokはそのまま消滅。

資料をパラパラとめくつていいくと脱走したロボットの設計図がわかつた。

一見、ドールとしても通じそうな10代の少女型。見覚えのあり型だ。いや、見覚えがあるどころか

「なにか分かりましたか？」

パルシアルがあたしを覗き込むように言つ。
あたしは資料を持ったまま、パルシアルの全身を眺めた。まったく同じタイプだ。

ある目的で造られたんですけど、ある事件が起きてそのまま廃棄処分されるところを

パルシアルの言葉が蘇る。

ある目的が軍事目的。事件とはプログラムの異常。なぜ、パルシアルがこれほどまでに人間に似せてつくられたかは、敵に怪しまれないようにするため。

そうだとしたら、全て辻褄が合つじやないか。しかし、それならばなぜ

「どうかしたんですか、ウーノさん」

あたしの態度に違和感を感じたのか、パルシアルが不思議そうに訊いてくる。

「顔色が悪いようですか？」

なぜ、こいつはあたしを殺さないんだら？

あたしは、無防備なパルシアルを蹴り飛ばし、傍らに置いていたライフルを素早く構えた。そんなあたしをパルシアルは尻餅をついたまま目を丸くして見つめてくる。本当に人間そのものの所作だ。

銃口を向けられているパルシアルがゆっくり立ち上がる。

軍事用に作られたボディにどの程度の能力があるのか想像もつかない。緊張に体が硬くなる。

しかし、パルシアルは呆れるほど暢気な声で「……いつたいな。そういう趣味があつたんですね、ウーノさんは」とお尻をさすつた。

油断させるための作戦だらうか。緊張を解くことなくパルシアルを睨みつける。

しかし、パルシアルの表情は一毫も緊張しておらず、いつも通り人間臭い笑顔を浮かべている。

だが、その体はあたし同様に緊張しており、あたしからなにか仕掛けられたら、即座に対応できる状態にシフトしていることが見てわかった。

あたしは警戒態勢を崩さないよう気をつけながら、パルシアルに資料を投げ渡す。バサリと音を立ててそれはパルシアルの足元に散らばつた。

「それ、あんたでしょ」

足元の資料をパルシアルは無言で一警する。

「危うく騙されるとこりだつたよ
「……ウーノさん」

パルシアルが資料を踏みつけて、一步足を踏み出す。

銃口は変わらず彼女の動力部を捉えているのにだ。そんなことはまったく意に介した風もなくパルシアルはあたしに近づいてくる。

「動くな！」

あたしは、牽制にパルシアルの足元めがけて発砲した。パルシアルの足が止まる。

「このロボットはどうして人を殺すんでしょう、だったつけ？ あんたの質問」

「あんたじゃなくて、パルシアルですよ」

「なんことはどうでもいいよ。で、その答えはなんだったの？ あんたが一番知ってるはずでしょ」

「プログラムだつて、ウーノさんは言つたじゃないですか」

パルシアルが冷静に言つ。

「あたしはあんたの口からホントの答えを聞きたいんだよ」「じゃあ、ウーノさんにも質問に答えて欲しいですね」

いやに意味ありげに微笑むパルシアルに鼓動が少し早まる。

「なに？」

「私がしたもう一つの質問ですよ。人はなぜ人を殺すんでしょうか？」

「……それは、感情があるからだって、言つただろ」

一度、言つた嘘臭い言葉をあたしは口にする。パルシアルはあたしの答えに満足したように笑つた。

「なるほど、感情ですか。それは、無差別テロという行為だったとしても当てはまりますかね」

瞬間、あたしの心臓は跳ね上がつた。

なぜこのタイミングでそんな単語が出てくる。なにを知っているんだ、こいつは。全てを知っているというのだろうか。

あたしは、探るようにパルシアルを見る。

「失礼だと思つたんですけど、少し調べたんですよ、ウーノさんのこと」

あたしの不審の視線に気づいたのか、パルシアルが声。

「な、なんで、そんなこと」

掠れた声で問うと、パルシアルは「ウーノさんに興味があつたからです」と笑つた。

「ウーノさん、2年前にテロで妹さんが行方不明になつてますよね。遺体は発見されないまま公式に死亡通知が出されました」

街の中央に建設されたセンチュリービル。オフィス、レストラン、ファッショングループ、などをそなえた複合ビルで、いつも多くの人間がそこにいた。

街の中枢を担つていたそれが、テログループによつて爆破され、何万人もの犠牲者を出したのは有名な話だ。

「テロを企てたリーダー格の人物はその直後に何者かに殺害されていますね。実行犯は行方不明ですがリーダー同様殺害されたと見られています。テログループは誰がリーダーを殺したのか疑心暗鬼になり今はもうちりぢり これじやあ、憎しみにまかせて仇討ちもできませんね」

パルシアルの端的な話を聞いていると、それは本当にくだらない

ことだと実感できた。ずっとそうだとは思っていたけれど、これほど今までにくだらないことだったのだ。

パルシアルは全てを見透かした目であたしを見ている。

「……なにが言いたいの？」

「つまりですね、爆破テロを実行する人間は、どういう理由でそうしようと思つのかが知りたいんですよ」

パルシアルが一歩足を踏み出した。先程のように牽制をする余裕は今のがたしにはない。

「そうそう、今回の amok 社製のロボットによる連續殺人なんですか？ あれば、実は無差別に行われているわけじゃないんですねよ」

「こちらの返事も待たずにパルシアルは勝手に話しあじめた。

「ロボットは正確ですからね、誰か一人を殺すために無関係の人間を殺すようなことはしません」

「……じゃあ、今まで殺された人間はどういう理由で殺されたんだよ？」

資料に載つっていた被害者リストにはまったく関連性が見当たらなかつた。話がそれたことで少しだけ落ち着きを取り戻してそう尋ねる。

「殺された人間は直接的にでも間接的にでも Amok と必ず関わっているんですよ。出資者だつたり、企業だつたり……殺人口ボットのプログラムは Amok のコンピュータに名前が載つている人間を殺すようになっています。つまり、プログラム通りというウーノさ

「……この答えは正解だったわけですね」

流暢に喋るパルシアルに呆気に取られながらも、「なに、他人事みたいに言つてんの」と毒づく。

しかし、パルシアルは「ウーノさんと違つて他人事ですかうね」とニッコリ笑つた。

心臓を抉るようなその言葉にあたしは言葉に詰まる。

「言い忘れてましたけど、私はamok社の殺人口ボットではないですよ」

「え？」

「言つたじやないですか。ある目的で造られたんですけど、ある事件が起きて、そのまま廃棄処分されるところだつたつて。私は、ウーノさんが追つている殺人口ボット、AIつて言つんですけどね、そいつのプロトタイプとして造られたんです。AIが完成したら、一緒に仕事をするはずだつたんですけど……ウーノさんもご存知の通り、AIが研究所の人間を殺して脱走しちやつたもんですから、私は職を失つて散々ですよ」

「……本当にあんたじやないの？」

「ええ。私ではないですね。だから、いい加減にそれを下ろしてほしいんですけど」

パルシアルはあたしの手にあるライフルを指差す。

一瞬、迷つたもののパルシアルの体から警戒態勢が消えていることに気づいて、あたしは素直にそれをおろした。

パルシアルが満足げに笑む。

「で、さつきの質問に戻りますけど。人が人を殺す理由に感情とい

うものが存在するのは、なんとなくですが分かります。でも、無差別に人を殺す人はどういう理由でそういうふうするんですか？」

「……さあ

「分かりませんか？」

念をおすようにパルシアルが言ひ。

分からぬ。

なぜなんて、今さら聞かれても分かるはずがない。いや、あの頃、聞かれたつて分からないだろう。

頃垂れながら首を振る。

「そうですか

パルシアルは幻滅したようなため息を吐くと部屋を出て行つた。

めまぐるしく飛び交う嘘、情報、犯罪。

あの頃の私は、この手で何でもできると思っていた。できないことなんて、なに一つないと思い込んでいた。

だけど、それは単なる思い違いで、それに気づかなかつたあたしはバカみたいにくだらない過ちを犯した。

オートロード
人口走路からおりると、途端に人の群れと行き当たる。

立ち並ぶ高層ビル。人工的に造形された直線の世界の象徴。排ガスと雑踏の中で生まれる熱気、無機的な香りのない空間が大都會を巻き込んでいる。

あの日以来、来たことのない街の中心部。あたしがいなくとも、世界は動いている。

パルシアルがいなくなつてから数日、あたしは久しぶりに外に出た。

目的なんてない。ただもう一度確認したかつただけだ。人が一人いなくなつても、世界は変わらず動くつてことを。

目的のない数時間過ぎた後、あたしは思い立つて警察署に行つた。仕事を断るためだ。

信じてといった手前、なんの連絡もなしにロボットの捜索を打ち切ることは気が引けた。そこまで気が回るほどには、あたしの精神は落ち着いてきたんだろう。

大丈夫。あたしは、まだ大丈夫だ。

警察署の扉を開ける。瞬間、嫌な匂いがした。

硝煙と血の入り混じった独特の匂い。床には砕けたガラスが散らばっている。右奥の廊下から銃声。悲鳴。足音。そして、静寂。異様な気配。何かが起こっている。確実になにかが起こっていた。

恐る恐る移動し、廊下の奥を窺う。視線の先には何体もの死体が転がっていた。

「つ！」

いつたい、なにが起こったんだ？

あたしがここに入つて来て銃声を聞いてから、まだものの数分もたつていない。危機感が聊か足りない警察とはいえ、これほどあつさりと殺されるものだろうか。

あたしは湧き上がつてきた唾を「ククリと飲み込む。

この殺戮者は何者だ？

なるべく足音を立てないように気をつけながら、ゆっくり歩を進める。見知った空間がまるで始めてくる場所のように感じられた。あたしはいつもライフルをかけている肩に手を伸ばし、今日は持つてきていなかつたことを思い出した。手持ちの武器は腰に挟んだハンドガンだけだ。

爆発しそうな心臓を意識しながら、どうにか呼吸を落ち着かせようと努力する。

ケイちゃんは無事なんだろうか？ 不意に思い出した。

彼女のいる場所は、署内の地下だ。殺戮者が地上からやつてきた

のならまだ生き残っている可能性もある。

どうする？ 逃げるか？

考えるより先にあたしはハンドガンを片手に走り出していた。

チカチカと点滅する照明。静かだ。死体もない。

壁にもたれかかるようにして様子を窺う。いつもケイちゃんが座っているはずのデスクは空いている。

なんだ、上手く逃げたのか あたしがそう安堵の息を漏らした

瞬間

「あれ？ ウーノ、そんなどこでなにしてるの？」

反対側の通路から暢気な声がかけられた。

コーヒーカップを持つたケイちゃんが、軽い足取りであたしに近寄ってくる。上でなにが起こっているのか、まったく気づいていないようだ。

あたしは呆れて彼女を見ていたが、ふとその背後になにかが忍び寄っていることに気づいた。

「ケイちゃん！！ 避けて！…………！」

ソレが明確な意志を持つて動き出すと同時に、あたしは叫んでいた。

ケイちゃんが反応できるかどうかも考えずに、ソレに向かって引

を金を引く。

銃声と悲鳴と着弾音。それら全てが重なる。油断していたのか着弾の衝撃でソレは後ろに吹っ飛び、床に激突する動きを止めた。

横に飛んで銃弾を避けたケイちゃんは、たった今何が起ったのかいまだ分からぬでいるのだろう。呆然とあたしを見ていN。

「なにしてんの！ 昂くこいつち来て！－」

あたしが怒鳴るよつに歯をかけると、よつやくケイちゃんは我に返つて立ち上がつた。

「い、一体なんなのよ？ ビツコツヒツヒツ？ なんなのあれば？」「警察お待ちかねのロボットが到着したんだよ」「え？」

軍事用に作られたロボットは、警察に届けられるはずだった。

もしかしたら、この間、ケイちゃんが新しくつぶられると言つていた部署に配属される予定だったのかもしれない。だとすれば、Amokのコンピュータにこの署の人間の情報が載つっていてもおかしくない。

そして、その情報を元に、いつも簡単に殺人を犯す軍事用のロボットがここにやってきた。

真偽はともかくそれがあたしの出した結論。

「ともかく、ケイちゃんは逃げてよ」「ウーー、あんたはびりするの？」

ケイちゃんの戸惑いに満ちた声と、ソレが立ち上がるのと同時に止った。

さつきの被弾で左肩が少し削れているが、たいしたダメージにはなっていないようだ。ゆっくりとこちらに向かってくる。

「ウーー……早く逃げないと」

ケイちゃんが震えた声であたしの肘を引っ張る。
きつと逃げても無駄だ。

人を殺すために作られたソレは相手に逃げられたからといって追跡を途中でやめるほど甘くないだろ？ 一度、狙いをつけたなら、例え地の果てまでだつて追いかけてくる。あれはそういう類のものだ。

そして、たつたいまソレに攻撃を加えたあたしも攻撃対象に入ってしまったはずだ。ならば、戦うしかない。

「ケイちゃんだけ逃げて」「でも」

ソレが攻撃態勢に入るのが分かつた。

「ケイちゃんがいると邪魔なんだよ……」

あたしはケイちゃんの手を振り払い、凄まじい速度でこちらに接近してくるソレに引き金を引く。ソレは、今度は吹き飛ばない。

銃声。銃声。銃声。

すぐ間近までソレが来る。

ヤバい！ そう思つた瞬間、世界が回転した。逆転する天地の中、なんとか受身を取る。すぐに次の攻撃に備えて身構える。が、ソレはあたしを攻撃した位置で止まっていた。

「……なんだ？」

不思議に思つてそこに田をやると、まだ逃げていかないケイちゃんの姿が視界の先に映つた。

「のバカッ！…」

舌打ちしながら、ソレの足元を狙つて引き金を引く。着弾。バランスを崩してソレが倒れる。

ケイちゃんは一瞬、あたしを見て、はじかれたように走り出した。

「つたぐ…… やつやと逃げりよ。お前もそいつだら？」

ゆらりと立ち上がつたソレに笑いかける。

ソレは、タイミングを見計らつているのか攻撃をしてくる気配はない。

3原則に当てはまらないロボット。人を殺すことが許されたロボット。

それは一体なんと呼ぶのが正しいのだろう。

改めて思ったのは、パルシアルのほうが会話が成り立つだけまだましだといつ、どうでもいいことだった。

あたしは、銃を握りなおす。

人間に似せられたボディに、凄まじい機動力、これで装甲がぶ厚

く出来て いるといふことは、まず考えられない。

残弾数がどのくらいか覚えていないが、的を一つに絞つて、確実に弾を撃ち込めばきっと破壊できるはずだ。

銃を構えると同時にソレの姿がぶれた。尋常でないスピード。

死神の鎌のようなブレードが光つた。咄嗟に後ろに飛んで避ける。鎌が左腕を掠める。信じられないほどの激痛が走つた。飛び散る。

赤。紅。朱。

歯を食いしばって、痛みを意識から排除する。

視界にソレがうつる。ソレはすぐに次の攻撃を加えようと足を一步出し、体勢をくずす。先程の足元への攻撃が功を相したのかどううか。ともかく、あたしにとつてはその一瞬で十分だった。

一撃動でソレの動力部があるところに照準、発砲する。

5発目で装甲がはがれる。

ソレが動く時間を与えないように休むことなく引き金を引き続ける。

動力部が露になつた。後一発で、破壊できる。あたしの勝ち。引き金を引く。

カシッ。

勝ちを確信したあたしをあざ笑いつつに撃鉄が空の弾倉を叩く音が空間に響いた。

「マジかよ……」

弾切れ。最悪のタイミングだ。

ブレードが迫つてくる。ソレを蹴り飛ばした反動で横に転がる。微かに腹部を掠めるブレード。血が宙を舞う。その痛みを感じる

まもなく、ソレの蹴りが的確にブレードを掠めた腹部へ飛んでくる。

再度回転する世界。

事務室のガラスを突き破って、あたしは吹き飛ばされる。

今度は、受身を取る暇もなかった。したたかに背中を打ちつける。一瞬、呼吸が止まった。

全身が狂ったように酸素を求めているのに肺が痛くて息ができるない。左腕の傷口からもドクドクと血が流れているのが生温い。起き上がろうとするとき涙が出そうなほどの痛みが全身に走った。動くのは右腕だけ。武器はもう何一つない。

あたしがここで死ぬのか？

ほんやつと思つ。

「なんかウーノつてや、死ぬために壊し屋やつてるみたいなどいるでしょ」

ケイちゃんの声が遠く聞こえた。

死ぬため？

あたしが、死ぬために壊し屋をやっていたのなら、今の状況は願つたり叶つたりだろう。

でも、違う。そんなんじゃない。あたしが壊し屋になつたのは死にたいからじゃない。

じゃあ、なんのために？

「分かりませんか？」

パルシアルの声。

分からぬ。いや 分かつてゐる。

カツンという音が聞こえた。床を踏む死神の足音。
あたしはゆっくり瞳を開ける。痛みでいつの間にか瞼を閉じてい
たらしい。ぼんやりとした視界が広がる。
少し離れた場所にソレは立っていた。

あたしは、死にたいなんて言える立場じゃない

既に射程距離内だといつに、ソレはさらに近づいてくる。

みつともないくらい無駄に生きて、苦しみでのた打ち回つて、
「ミミみたいに朽ちるのが一番似合つてる

あたしのすぐ近くまで来てソレは止まつた。

だつてそうじやんか。まったく関係ないたくさん人の命を奪つ
て、知らなかつたからとはいへ、大切な人までその手にかけたんだ
から、それくらい苦しんでもまだ足りないだろつ！

ソレの顔にはじめて笑みが浮かぶ。作り物めいた笑顔。

ああ、これはロボットだな。

あたしはほんやりした頭で思った。
ソレが、ゆっくりフレードを振りかざす。不意に妹のことが脳裏をよぎった。

この期に及んで自分に都合のこい思い出に浸るほど、あたしは恥知らずではないし、妹に許しを乞えるほどまともな人生を選んでこなかつた。

だから、これは在り来たりでぐだらない感傷だらう。

無理矢理、妹のことを頭から追い出す。やつするとあたしの脳裏は空っぽになつた。

これでいいんだろう。屑みたいなあたしはがらんどうのまま死ぬのが一番いい。

覚悟を決めてソレを見上げる。

ソレは無表情でフレードを振り下ろした。瞬間、パンと火薬がはぜる聞き慣れた音がした。

ソレがあたしに向かつて崩れ落ちてくる。あたしは思わず右腕を動かして、ソレの下敷きになるのを防いでいた。

「あれれー？ まだ動けるじゃないですか」

あたしが右手で押さえていたソレを、ヒヨイッと取り除くと、そいつは暢気な声で言つた。

「……あんた、なんでこーこー？」
「あんたじゃなくて」

「……パルシアル」

「」の期に及んで、バカみたいな」と「」だわるパルシアルに苦笑する。

「そり。やつぱりフルネームで呼ばれると嬉しいですねえ」

パルシアルは満足そうに領き、ソレをまるで「」を扱うように手で掘むと放り投げた。

「……で、なんでここにいんの？」

「実は、ずっと秘密にしてたんですけど……」A.I.が脱走した後から、私は彼女を殺すために独自に搜索をしてたんです。そうしたら、たまたまウーノさんもA.I.を搜索してたので、これ幸いと思つてウーノさんの傍に」

「……じゃあ、なんで家出て行つたんだよ？」

「それは……ウーノさんが1人になりたそつたので、私なりに氣を遣つてみたんですけど……なにか問題でもありましたか？」

「気を遣つて柄かよ」

「私は、ピースな愛のポジティブですからね。はい、起きあがれますか？」

パルシアルは意味の分からぬ言葉を言いながら、あたしに手を差し出す。

あたしは腹部を押さえながらパルシアルの手を握る。

立ち上ると血が足りないせいかくらくらした。体もズキズキと痛む。

「歩けますか？」

「……いや、無理っぽい」

「じゃあ、おんぶしてあげます」

パルシアルはいきなり屈みこんだ。そのままの体勢で「どうぞ」とわたしを振り返る。

「はあっ！？ いいよ、いるない。やつぱり歩く、歩ける」「遠慮はなしですよ」

馬鹿だ、こいつは。まったく警戒のない背中に毒づく。あたしが壊し屋で自分は違法廃棄口ボットだと立場を忘れているんだろうか。

今、この瞬間、あたしに壊されても文句は言えないの。つていうか、こいつだって元々はあたしを殺す気だったんだから、今が絶好の機会なんだけどな。

ホントに馬鹿なヤツだ。

「早くしてくださいよ」

パルシアルの声にあたしは一つ嘆息して、その背中に体を預けた。パルシアルはあたしに振動を伝えないように気をつけているのか、ゆっくりと歩き出す。

歩きながら「救急車が来るまであと一〇分程度ですよ」とパルシアルが口にした。別にどうでもいい。

外は薄暗くなっていた。凍えた灰色の雲が、街をすっぽりと包み込み、いまにも雨が降りだしそうだった。

まだ救急車は来ておらず、パルシアルはあたしをおぶったまま「退屈ですね」と空を見上げた。

あたしはゆうべ口を開く。

「誕生日だったんだ」

「はい？」

「妹が死んだ日はあたしの誕生日だったんだよ」

パルシアルはあたしを気にするようにチラリと首を回したが、すぐにそれを戻した。あたしは気にせずに話を続ける。

「妹は彼氏の家に行くって言って出かけて、それでそのまま帰つてこなかつた。でも、ホントはあたしの誕生日プレゼントを貰つたために、センチュリービルに行つてたらしくてさ」

氷の粒が紛れ込んでいるような冷たい風が頬を撫でる。泣きたくはならなかつた。

「その日があたしは、自分のしてきたことで馬鹿みたいに頭一杯だつたから……いつも暗くなる前には帰つてくるあの子が帰つてこなしても、そう気にしてなかつたんだ。それより、いつ事件のことが流れるかつてずっとTVに釘付けでさ。速報で事件のことが報道されて、ガツツポーズなんかしちやつて。乾杯しようと思つて冷蔵庫開けたら、その中に手作りのバースデー・ケーキが入つてたんだ。その時になつて、あたしははじめてその日が自分の誕生日だつてことに気づいたんだ」

気づいた時には、もうあたしの誕生日を祝つてくれる人間はいなくなつてたけど。

「ホントどうしようもないバカだよね」

情けない笑いが喉の奥から漏れる。

今まで誰にも言わなかつたこと。かといって、忘れることもできなかつた。忘れられるはずがなかつた。
この世界でたつた一人の大切な人を殺しておいて、それを忘れてのうのうと生きるなんて、できるはずがなかつた。
だから、せめて苦しもうと思つた。苦しんで苦しんでその果てに地獄に墮ちればいいのだと。

それはあまりにも自己本位な考え方だけれども

あたしが話し終わるのを待つていたかのように、冷たいモノが頬に当たつた。雨が降り始めたようだ。

曇つた天を仰いで雨粒を顔で受け止める。

この雨がなにもかもを流してくれるなどとは思わない。ただ、なんとなくそうしたかつた。

「ウーノさん」

不意にパルシアルがあたしを呼んだ。

「……ん？」

「これからは、私のことパルって呼んでもいいですよ」

「ズルはなじじゃなかつたの？」

「特別です」

パルシアル、いや、パルが微かに笑う。

その振動が傷口に響いて痛かつたけれど、不思議と氣にならなかつた。遠くでサイレンの音が聞こえていた。

いつもは穏やかな私の工房では、先程から熱い口論が繰り広げられている。それも私の目の前で。

口論はマスターである金髪の少女が、人形の体感機能のレベルを下げて欲しい、と私に注文したことに起因している。それはかなり珍しい注文だった。逆の注文なら多数あつたけれど。

人形はそのことを全く聞かされていなかつたらしく、血相を変えて抗議をはじめた。

それから10分。何度も同じやり取りが繰り返されている。

「絶対に、嫌ですかね！　私のお買い物よりも無駄なお金の使い方ですよ、それは」

「ガタガタ言わないでしてもらえって。ただでさえ、お前は普通と違うんだから」

「そりやあ、私はそこらの**おバカな人形たち**と違つて完璧ですけど……ともかく今までいいです。お布団は、ふつかふかのが当たり前前なんです！」

「あ、おい！！　ちょっと待てって！！」

主の制止の声も聞かずに少女人形は店を出て行つた。

命令に忠実なのが売りの人形にしては、およそらしくない行動。

私の良く知る彼女の姿に重なる。

彼女以外にもあんな人形が存在していたのかと、私はなぜか少しホッとしていた。

「……つたく、逃げ足だけは速いんだから」

ドアの上で揺れている鈴を睨みながら、少女が苛立たしげに床を蹴る。その拍子に肩に掛けていたライフルがズルリと落つこちた。少女が慌ててそれを引き上げる。

流れるような「ミカルな動きに、笑つていいものかどうか逡巡していると、少女が「すみませんねえ、あいつ、我侭で」と、私の方を振り返つて申し訳なさそうに頭を下げた。そこでまたライフルがズリ落ちる。わざとしていえるのかと思わせるほどのタイミングだ。
吹き出しそうになるのをこらえながら私は「いえ、大丈夫ですよ。マスター」と人形が喧嘩できるなんていい関係じゃないですか」と言った。本心だった。

私の言葉に少女は「いい関係ねえ……」と咳き苦笑を浮かべる。

「まあ、いいや。今度は、あいつをちゃんと説得してから来ることにするよ」

「お待ちしています」

私が頭を下げるとき少女も軽く会釈をし、そのまま小走りで工房からでていった。なんのかんの口では言つても先に飛び出していく人形のことを気にしているらしい。やはりいい関係だと思う。2人が出て行つたドアを一時見つめる。それから、たまつていて仕事にとりかかることにした。

私の仕事は、擬似恋愛用のために創られた人形のカスタマイズをすることがある。元々、人形にはそれ相応の基礎プログラムが備え付けられている。

ただし、より自分の嗜好に合つた人形を求める利用者は多い。当然といえば当然のことだ。彼らは自分の思い通りになる人形が欲しいのだから。

ただのロボットのメンテナンスと違つて、人形のカスタマイズを生業とするカスタマーは、主に人形の性的な部分を弄る為、より高度の技術が必要とされ、まだまだ需要のそれには追いついていない状況だ。おかげさまで私の商売はけっこう繁盛している。

人形の普及に伴つてできた職業の中で、カスタマーは壊し屋について高給取りといえるだろう。

別にそのことに誇りを持つていいわけじゃないけど、むしろ、

逆だ。暮らしが楽なのは結構なことだと思う。

独立してから衣・食・住に困ったことはないし、自分の趣味に取れる時間も僅かながらある。私は今の生活にかなり満足している。

今の生活、彼女との二人暮らしに

「マーク、そろそろ起きなよ」

朝、私のベッドを占領している彼女にそう声をかける。

「ん……かおりさんも一緒に寝ましょう」

彼女は寝ぼけ眼のままバカなことを言って、少しだけ横にずれた。そうすると、彼女の隣に一人分のスペースが空く。

「ほり」

パンパンと空いたところを手で叩きながら、子供のような瞳で私を見つめてくる。

仕方なく、私は彼女の隣に身を滑り込ませた。

「かおりさん、体冷たい」

彼女は私の背中に腕を回し、「仕事しすぎ」と咎めるまゝに呟いた。

「仕事じゃないよ

「……じゃあ、なに?」

「マークに友達作ってあげたの」

言つと、彼女は不満そうに眉間に皺を寄せ、私から体を離した。喜んでくれると思っていただけに少し意外だ。

私がその態度に困惑していると「どうこう」と彼女が問う

てきた。

「私が仕事でいない時、暇だ暇だつて言ってたでしょ？だから、仕事で余ったパーツを集めて、一から人形をつくれてみたのよ」「……ふーん」

彼女は氣のない返事をすると、ベッドから体を起こし、そのまま部屋を出て行ってしまった。

その後姿を見送つて、私は落胆の溜息をついた。

一体、なにが氣に喰わなかつたのだろう？　いつまでたつても氣まぐれな彼女の行動は私には理解できない。

ふと先日の中マスターと人形の喧嘩のことを思い出す。

マーサも言いたいことがあるのなら、あの人形のように遠慮なく言つてくれればいいのに。それとも、どれだけ長く一緒に暮らしても、元々の主マスターじゃない私が相手では無理なのだろうか　考えて、私はベッドに体を横たえたまま疲れた双眸を閉じた。

マーサは、私が仕事と関係なく接した初めての人形だ。

その頃、カスタマーとしてまだまだ駆け出しだつた私の一日は、カスタマイズに必要なパーツをスクラップ置き場から拾つてくることからはじまつていた。

丁度、人形ドールが大流行した時期で、それと同時にスクラップ置き場には人形の残骸が捨てられるようになつっていたからだ。

その日も、そうだった。
いつものようにスクラップ置き場にいつて　そして、私は彼女を見つけた。

元々の主の趣味なのか、少し下品に感じられる金色の髪に大きな二重の瞳がとても印象的だつた。

スクラップ置き場には、彼女のように壊れてもいいのに捨てられる人形はたくさんいた。

それなのに どうしてだか分からない。彼女と目があつた瞬間に家へ連れて帰られなければいけないような気がした。

今、思えばそれは一目惚れだつたのかもしれない。

なぜなら、その時の私は彼女が男性型として、つくられた人形だと勘違いしていたのだから。

もちろん、家に連れ帰つて体のメンテナンスを始めた時に、その人形が彼ではなく彼女であることが分かつたのだけれど。

メンテナンスを終えると、ぐつたりしていた彼女はすぐに元気になつた。

ただ結構な人見知りなのか、なかなか私に打ち解けようとはしてくれなかつた。

それは人形の性質としてどうなのかな、とも思つたが、私は私で人見知りする性質なので上手く彼女と接することが出来ず、暫くの間、私たちはぎくしゃくしたまま日々を過ごすことになつた。

そんなある日のことだ。

「か、かおりさん」

彼女が不意に私の名前を呼んだ。

私は驚いて返事も返せず、彼女をただバカみたいに見つめてしまつた。

たかだかそれくらいのことで、と思われるかもしれないけれどその時まで彼女は私のことを一応、^{スター}主と呼んでいたのだ。

ただ私は、彼女の本来の主ではないから、彼女からそう呼ばれることに少し抵抗があつた。

そのことを彼女にも何度も伝えたことがある。それでも彼女は、頑ななまでに私のことを^{スター}主と呼ぶのをやめなかつた。だといつのに、その日、急に

あまりの驚きに固まつて「な、名前違いましたっけ？」と、彼女は不安そうな声でいった。私は慌てて首を振つた。

「よかつた。記憶領域が壊れてるのかと思いました」

彼女はそういうてホッとしたように笑つた。

それが随分と彼女の印象を変える笑顔で、私はまたバカみたいに口を開けなければならなかつた。

結局、なにがきっかけで、彼女が私のことを^{スター}主と呼ばなくなつたのかは、今だに分からない。

単純に私が^{スター}主に値しなかつただけなのかもしれないけれどの頃から彼女は気まぐれなのだ。

私は深く嘆息し重い体を起こす。寝不足のせいで少しだけクラクラした。だけど、そもそもいつてられない。機嫌を損ねた彼女がそろそろ物にやつあたりしはじめてもいい頃だ。

ボサボサになつた髪を撫でつけて、私は隣の部屋に向かつた。

私が部屋に入ると、彼女は白いソファの上にあぐらをかいて座っていた。

なんの感情も見せない無表情。端整な顔立ちのせいで、そりする
とひどく冷たい印象を『』える。

「マーク？」

呼びかけると、彼女はふいとわざとらしく私がいる方とは反対
側に顔を向けた。まるで子供だ。

さて、どうやって不機嫌な彼女をなだめよつか?
気づかれないように息をつき彼女の隣に座る。と、彼女は体「」と
私に背を向けた。

「ねえ、なにをそんなに怒ってるの？」

理由が分からなければどうじょもない。私は仕方なくそう切り
出した。

「分かんないんですか？」

言外にそれくらい分かつて当たり前だという響きが含まれている。
だけど、分からぬものは分からぬ。

「……『メン、分かんない』

私が言つと、彼女はよつやくへりへりに向き直つた。先程と違つて
どこか悲しげな眼差し。

「かおりさん、新しい人形ドールつくりたんでしょう？」

「うん。初めてにしては上出来つていうか会心の作なんだよ、これが

が

重たい空氣に耐えかねて冗談めかしてそう言つと、彼女はますますその瞳を曇らせた。

「かおりさんは、あたしのこと嫌になつた？」

「え？」

「だつて……その新しい子にあたしの代わつせゐるんでしょう？」

言われて、はつとした。彼女は一度捨てられている。そのことを思い出した。

機械ロボットだつて捨てられれば傷つく。傷つかないわけがないじゃないか。特に人形のよう人に間に似せてつくられていゐのなら、なおさら。

主に捨てられるといつことが、彼女たちにとつてどれほど深い傷になるのか、私には想像もつかないけれど。

人間が新しい人形ドールを家に連れてくるといつことは自分が捨てられるということ。彼女がそう考へてもおかしくはないのに、私はあまりにも軽率すぎた。

「「」、「めんなさい、マーサ。そういうつもつじやないのよ

私は優しく彼女の両頬を手で挟みこむ。

彼女は泣くのをこらえるかのよつて口を開かずつと一文字に結んでいた。

「ホントにマーサに友達をつくりあげたかっただけで……ゴメン

ね、不安にさせて。「メン」

「……ホントに?」

「うん」

「絶対?」

「うん」

頷くと、彼女はホッとしたように元を綻ばせ私に抱きついてきた。

「マ、マーサ?」

「ねえ」

「な、なに?」

「かおりさんの一番はあたしですか?」

耳元で囁かれる。彼女の問いに私は顔が赤くなるのを感じた。子供っぽくてホントは小心者のくせにこんなとこだけ気障に決めてくれる。一体、どんなプログラミングをしたらこんな人形ができるんだか。

私は、半ば呆れながら しかし、彼女がこういふことを口にできるような関係も、傍から見たらいい関係になるのかなと思つた。あの時の少女の苦笑の意味がなんとなく分かつたような気がする。

あの2人が主と人形マスター ドールという、ただ一方通行の主従関係ではないよう、私たちもそうなのだろう。だから、きっとマーサは私のことをもう一度と主とは呼ばないはずだ。

なぜなら、私たちの関係は
「ねえ、かおりさん、答えは?」

催促の声に、私は確かな意志を持つて頷いた。

その人形は特別製^{ドール}といふこともあって、人形屋^{ドールショップ}で売られているどことなく顔つきが似通つた人形達とはまるつきり違つて見えた。

「あと数分もしたら目を覚ますと思つただけど」

「^{ドール}の人形の製作者であり、^{ドール}カスターであり、あたしの遠い親戚でもあるかおりさんは、^{ドール}言つと時間を確認するように腕時計に視線を落とす。

そして、申し訳な^{ドール}うな顔になつた。

「^{ドール}めんね、今日はちょっと時間がなくて、起動まで見てあげられないんだ」

「^{ドール}ん、無理言つて来てもらつたの、あたしの方だし」

かおりさんは、^{ドール}の間、腕利きのカスタマーとしてなにかの雑誌に載つてから、^{ドール}カスタムの予約が、じやんじやんきて、てんやわんやしているらしい。

そんな状況なのに、あたしのことを優先して来てくれたのだ。感謝^{ドール}こそれ、謝つてもうつようなどじやない。

「ほら、かおりさんはもう行つて。あたしは本当に大丈夫。これでも一応、小さい頃からかおりさんが仕事してゐるところずっと見てきたんだから」

まだ申し訳な^{ドール}うな顔してゐるかおりさん^{ドール}うつ言つて、彼女は少し思案してから「もし、なにか不具合があつたらすぐに私のところに連絡して」と、連絡先の書いた番号をベッドの脇の机に置いた。

「それじゃ、元気でね」

「うん、かおりさんも。あんまり根つめて仕事しないよ!」^{ヒヤヒヤ}」

あたしの言葉に、かおりさんは微苦笑を浮かべ頷くと、あたしを強く抱きしめて、部屋を出て行った。

おやなりにかおりさんを見送ると、あたしはまだ眠つている人形を見つめる。

もともと、この人形は、かおりさんと一緒に暮らしている人形が、かおりさんが仕事をしている間、寂しくないよう^{ヒヤヒヤ}にと、友達用プログラムを組んで制作したものらしい。

だけど、結局、理由あって、人形は当初の目的で使われることなく、かおりさんの家の倉庫に眠ることになったという。

その時があたしは、まさに悲劇の主人公になつたばかりで、病院の一室に閉じ込められていた。

入院している間、あたしはいろいろな人形^{ドール}を見た。

それらは全て、もう手の施しようがない死を待つだけの患者に与えられる看取り用の人形^{ドール}だつた。

病院側はその看取り用人形をつけて、あたしの精神の安定をはからうとしたようだけれど、それらはあたしの性分にはまったく合わなかつた。

プログラム通りの甲斐甲斐しさ。優しい言葉。

そんなの反吐が出る。そんなものに看取られるくらいなら、一人で死んだほうがマシだった。

病院から、あたしのそんな話を聞きつけたかおりさんは、お見舞いがてらに彼女を連れてきてくれた。「この子は一味違うよ」と言つて。

彼女は目がちょっと離れていて、画像のようないやすけに存在感ある鼻をして、パーツパーツだけとつてみるとひどくアンバランスなのに、全てのパーツが合わさるとなぜだかとてもキレイだった。

あたしを看取るのはこの人形だ、ピンと来た。

そこでかおりさんに無理を言つて、彼女のプログラムを組み変えてもらうように頼んでみたのだ。

かおりさんは、最初、あたしの申し出に戸惑っていたけれど、さすがに死期の近い人間の頼みを断れなかつたのだろう。意外にあつさりと了承してくれた。

かおりさんが、彼女のプログラムを調整している間に、あたしの病気は「やつぱり最期はお家で暮らしたいですよね?」レベルまで進行していた。

キューイーンと機械の駆動音が聞こえた。ようやく彼女のお目覚めだ。

あたしは彼女を覗き込む。睫が少し震えて、ゆっくりとその瞳が開いた。灰色に近い黒。

パチパチと目を慣らすように2、3回瞬きを繰り返したあと、彼女はあたしを見た。

ドキドキしながら彼女の言葉を待つ。こんな気持ちは久しぶりだ。彼女の唇が微かに動く。よく聞こえない。あたしは、その口元に耳を寄せた。

「・・・・・むあ」

「へ?」

意味不明。

顔を離して彼女を窺い見ると、彼女はにっこりと笑つた。

つられて笑つてみると、彼女は「あはは」とさらに相好を崩して、

あたしに飛びついてきた。

「うわっ……」

「びっくつした？」

「う、うん」

こんなに子供っぽいなんて思つてなかつた。

「名前どひするん？」

「名前つて？」

「コウナはコウナでしょ。あたしは？」

彼女はあたしを指差し、それから自分を指差した。

あたしの名前は、もう彼女の記憶領域の中に入つてゐるらしい。

「えつと……」

名前のことなんてちつとも考へていなかつた。

「は～や～く～」と彼女がじたばた暴れる。まるで地団駄を踏む子供だ。大人っぽい外見とは大違い。

あたしは、ほんのちよつとだけ、この人形ドールを取り用に選んでよかつたのかな、と後悔の念を抱いた。

やがて、彼女は暴れすぎてバランスを崩し、あたしが手を伸ばすよりも先に、後ろに倒れてごつんと頭を打つた。

「むう」

顔を顰めて唸る彼女を見て、ふつと名前を思いつく。

「ムーッ！」

「 むあ？」

「 ムー、 今日からあなたの」とまムーって呼ぶーー。」

「 ムー？」

「 そう、 ムーーーー。」

「 むあーーーー。」

名前が気に入ったのかなんなのか、 やっぱり彼女は意味の分から
ない言葉を発して、 あたしに抱きついた。

あたしは、 今日からムーと暮らす。
最期の日がくるその時まで。

「誰、これ？」

突然、お見舞いに来てくれた同じ施設育ちの彼女はムーを見るなり、慄然とした表情になつてそう言った。

彼女は人形の存在をあまり快く思っていない。昔、人形ドールといろいろあつたのだと聞いたことがあった。詳しくは教えてくれなかつたし、聞いてもないけど。

それを知つているから、あたしはムーが人形ドールであるということを彼女には隠そうと思つていた。

それなのに

「ユウナを看取る会、会長のムーだよ」

「……つまり、看取り用のドールってこと？」

「正解つ！！」

あつさりばれた。

「ユウナ……」

彼女は複雑な表情であたしの名を呼んだ。

「人形なんかに頼るのは……むぐつドール」

言いかけた言葉は急に口元に伸びてきたムーの手によつて止められた。

「……っにすんのよーー。」

彼女が乱暴にその手を払いムーを睨みつける。ムーは無表情のまま。

一触即発、竜虎相まみえる、ええつと桃栗三年柿八年、これは関係ないともかくとつてもヤバい雰囲気だ。

一人ともきつとあたしが超がつくほどの重病人だつてことを忘れている。

「あなたが人形嫌いなのは分かつたけど

険悪な空氣をどうにかしようがあたしが必死に頭をひねっていると、ムーが不意に口を開いた。

「コウナにひどいことを言う権利はないと思うんだ」

「はあ！？ 私がいつそんなこと言つた？」

「今、言おうとしたじやん」

ムーは無表情のまま。こんな顔は見たことがない。あたしの知つてるムーは、いつも馬鹿みたいに笑つてたから。なにを言つてもなにをしても、むあむあ言つてへらへらへら。でも、今はそうじやない。もしかしたら、怒つているのかもしれない。

ムーは人形だけど、かおりさん特製の人形だから、そんなこともあるのかもしれない。

あたしが横目でムーを盗み見ていると、それに気づいたのかふつとムーの顔が和らいだ。

そして、ムーは急に彼女の方に歩み寄り「というわけで、今度か

「あなたが来る日は、あたしはちょうど山へ芝刈りとか、川に洗濯にでも行つてゐるからさ。それでいいでしょ？」

「へ？」

突然、態度を翻された彼女は当たり前だけど、困惑しているみたいだ。無論、あたしも戸惑つてゐる。

「あなたが来る日は、あたしはちょうど山へ芝刈りとか、川に洗濯にでも行つてゐるからさ。それでいいでしょ？」

「冗談とも本氣ともつかないような口調でムーは言つ。

「そんなわけだから、あたしは出かけてきますかねえ

「……今日はもうこ ciòよ

「むあ？」

「もう帰るかい？」

玄関に向かおうとしたムーを手で制して、彼女が呟く。ムーは肩を竦めて私を見た。その間に、彼女はさつと玄関の方へ向かってしまう。

「……ユウナ」

ドアの前で彼女はピタリと足を止めた。

「え、なに？」

「……後悔しない？」

彼女があたしを振り返る。

後悔？

どういう意味なのか分からず答えるべくねでいると、ムーの腕があたしの肩を包んだ。
それを見て彼女は今日はじめて笑顔を見せ それは少し複雑そうな笑顔だったけど「ならいいや」と手を振つて、あたしの家を出ていった。

朝、日が覚めると、炊き立ての「」飯とお味噌汁の匂い。ムーはとても料理が上手だ。

朝食の準備ができると彼女は部屋に飛び込んで、あたしを優しく起こしてくれる。

「コウナ、今日の調子はどう?..」

「いいよ

「まあ! じゃあ、いただきます、できるね」

「うん」

毎朝、恒例のやり取り。調子がよくない日は、本当に残念だけど食欲がまったくなくて、彼女が、折角、作ってくれた料理が食べられなかつたりする。最近は、そんな日が多くて憂鬱だ。

でも 今日は本当に気分がいい。

「いっただつきまーす!..」

「」飯を食べるあたしを見て、嬉しそうにムーが笑つて。だから、こんな日はとても大切だと思える。

朝食が終わるとする」とはいろいろ。

一緒にゲームしたり、一緒に買い物したり、一緒に掃除したり、一緒に夜ご飯作つたり 大事に大事に壊れ物を扱うかのようにあたしに接してくれる病院とは違つて、ムーはあたしの調子をきちんとを考えながらも、無理をしなくてすむ範囲でいろいろなことを一緒にしてくれる。あたしは、それがとても嬉しかつた。

「皿洗い！ 皿洗い！！！」

スポンジに洗剤をたっぷりこめて、それを手に握ると泡がほわほわ出てくる。

ムーはその泡を見るのが好きで、食事の後片付けになると、いつもこんな風に楽しそうにはしゃぐ。

「好きだね、ムー」

ムーの洗つたお皿を、あたしは隣で受け取つて拭く。
あたしの言葉にムーは「泡樂しいじゃん、ふわふわ」と、皿についた泡をあたしに向けて、ふうっと飛ばしてきた。

もう諦めているけれど、こんな風に呆気なくはじけちゃうのは少し怖いな、ふとそんな感傷に襲われる。

「ユウナ」

不意にムーが妙に真面目な顔になつてあたしを呼んだ。

「なに?」

返事と同時に、ムーはわたしに向けて、また泡をふうっと飛ばしてきた。

わのせよつみの泡は、やはりあたしに当たるとせじかる。

「キレイだよねえ」

「え？」

「なんにでも終わりがあるからキレイに輝くんだよ

ポカソとムーを見ていると、彼女は優しい笑顔であたしをぎゅうと抱きしめた。

「あたし、コウナの輝きを最期までちゃんと見守つてあげるからね」

「ムー……」

後悔しない？

今、誰かにそう問われたら、あたしはすぐに頷くだらう。もし、明日、死んでしまっても、あたしはムーとの暮らしが後悔しない。

あたしよつと背の高いムーの胸の中から見上げる。

「いいこと言つたでしょ？」

ムーが子供っぽく、むあつと口を開けた。その視線は、まっすぐにあたしを見つめていて。例え、それが巧妙なプログラムだったとしても、なんだか照れくそくて嬉しくて

「ぜんつぜん」

「むあ？」

あたしは、その気持ちを誤魔化すために彼女から離れた。

「ほら、ムーが濡れた手で触るから、あたしの服まで濡れちゃった
じゃん」

「おおっ！ ホントだ」

ムーは、こいつあ大変だとばかりに大きさに両手を挙げた。
その弾みでムーの手に残っていた泡がまた宙に飛んだ。それはキ
ラキラしていて確かに綺麗だった。

あたしは、これからもこいつして彼女と一緒に暮らす。暮らしていく。
後悔しない最期の日を迎えるために

今日も私はスクラップ置き場に行く。

そこには色々な物が惜しげもなく捨てられている。それらの中には、まだまだ使えるものもたくさんあって、リサイクルショップに持つていけば、少しはお金になるんだ。

ぐしゃぐしゃに潰された鉄くずの塊を掘り起こしていくと、皮膚がはがれて内部の様子が薄つすらのぞいている壊れた人形が出てきた。

人形は発掘しても売れないから見つけても意味がない。

まあ、売ろうと思えば売れるけど 壊し屋たちと争つてまで売る価値がないのは確かだ。

がつかりしながら、それを蹴り飛ばした瞬間

「こんなにちは、アサノさん」

後ろからそんな声がかけられた。

振り返らなくても、こんなところで私に親しげに声をかけてくる奴は一人しかいない。

「また来たんだ」

少しうんざりした振りをしながら振り返る。

彼女は初めて会った時と同じように、フーンスの上に腰掛けていた。

「ほら、私つて暇人ですから」

私が言おつと思つた言葉を彼女は先に口にし、してやつたりといふ風に笑つた。

毎回毎回、彼女が来るたびに私がそつ言つから先手をとつたんだるつ。

「アサノさん、こちに来て休憩でも取つたらどうですか？」

彼女はそつ言つと、バッグからジュークを取り出して、私に投げてきた。

私は慌ててそれをキャッチする。彼女はこり笑つて手招きをした。

毎度のことながら有無を言わせない強引さだな、と感心しながら、私は彼女の座るフェンスに飛び乗つた。

彼女がここに来るよになつたのは3ヶ月ほど前。ふらりと現れて、今みたいにフェンスの上からジャンク漁りをする私たちを見下ろしていた。

彼女の服はいつも卸したてのよつキレイで、ジャンク漁りなんかする必要がないくらい、その暮らしどりが裕福だということが窺えた。

だから、彼女が一体なにを目的としてここに来たのか、顔見知りの仲間達ももちろん、私も不思議に思い、そして僅かな苛立ちを覚えた。

彼女から無言で眺められると、まるで馬鹿にされているよな気がしたのだ。

けれど、所詮は金持ちの道楽。すぐに飽きて来なくなるだるつ。そう思い、私たちは彼女の存在を全力で無視することにした。

ところが、彼女は毎週のよつこやつてきては、じつと私たちを見下すのだ。

しばらくすると、あまりの居心地の悪さに耐え切れなくなったのか、彼女の目の届かないスクラップ置き場へ移動する子がぽつりぽつりしてきた。

私はと、「こ」で皆と同じように場所を変えてしまったのは無性に癪に障ったし、それではなんだか彼女に負けてしまったような気がしたので、ついには私と彼女以外、誰もいなくなってしまったのも意地でもその場から離れなかつた。

スクラップ置き場に一人残つてしまつた私に、彼女は、漸くフェンスから降りてきて、遠慮がちに声をかけてきた。

それはすごくマヌケで、彼女が、なぜ、私たちを興味深げに見ていたのかを、一言で理解するには十分な問いかけだつた。

「ここでは、どういうお仕事が行われているんですか？」

そう、彼女は私たちがなにをしているのか、まるつきり分かつていなかつたのだ。

分かつていないのでから馬鹿にしようもない。それを馬鹿にされていると感じたのは、私たちがこの仕事に誇りを持つていなかつたからだろう。

勝手に卑屈になつていたことに気づいた私は、思わずその問いに苦笑してしまつた。

それからと「もの、彼女はチヨコチヨコとやってきては、私に話しかけてくるよつになつた。

「パルシアルつて変な奴だよね」

彼女からもらつたジュースを一口、口に含み言つと「やつですか？」と彼女は心外だというよつて首を振つた。

「変だよ」

「それは自覚したほうがいいくらいの変をでしようか？」

「うん、自覚したほうがいいよ」

私の言葉に彼女は納得いつたのかいつてないのかどちらとも取れる表情のまま「ふうむ」と唸つた。

まつたくもつて変な奴だ。

彼女は誰でも知っているようなことをまるつきり知らない世間知らずの癖に、かといえば急に小難しいことを私に問い合わせたりと、本当に掴めない性格をしていく。

「あの人形は売れないんですか？」

不意に彼女はさつき私が掘り起こした人形を指差した。

「うん、人形は売れないんだよ」

「どうしてですか？」

「人形は違法廃棄されてる確率のほうが高いもん。そういうのは、壊し屋さんのお仕事になるの」

私の言葉に彼女は微かに皮肉っぽい笑みを浮かべた。

だけど、それはほんの一瞬で「人形はどれくらい捨てられてるんですかねえ？」と、すぐにいつもの顔に戻つてそう言った。

どれくらい？

毎月のよう^{ドール}に新作がでる人形。

そのたびに買い換える裕福な馬鹿もいるらしいから、それこそ数限りなく無限にといつても過言じやないと思う。

そう答えると、彼女は「それではなんのために人形は生きてるん

「でしょうね」と、先程の「人形」を見ながら呟いた。

その呟きにギョッとして私は思わず彼女を見やつた。

「なんでかつて？ 人形が生きているなんて考えを持つのは人形愛護団体ぐらいしかいないからだ。」

自分たちが「人形」を救うと豪語しているあの糞くだらない偽善者集団。

彼らがどれだけ喚いたところで、違法に廃棄される人形は減るどころか増えるばかりなのに、その現実には目を瞑り、一体の人形を救えば全ての人形を救つた気になつておめでたい連中。私のもつとも嫌いなタイプの人間たち。彼女もその中の一人なのかなと思ったのだ。

しかし、彼女の表情からは、なにも窺いることはできない。

朽ちた人形を見つめる瞳だけ、あの団体特有の熱病みたいなものじゃない。

「……人形は所詮ロボットだよ。生きるも死ぬもない。あるのは壊れる、だけ」

わざとそう言つてみた。誰かにそう言わると、連中は絶対必死になつて反論するんだ。

そういう考えがこんな可哀相な人形を作り出すんですよ。見てください、まるで親に捨てられた子供みたいじゃありませんか

大の大人が顔真っ赤にして両手振り回して、馬鹿馬鹿しい。

親に捨てられた子供は人形とは全く違う。どうにかして生きる努力をするんだよ。例え赤ん坊だって、自分がここにいることを知らせるために大声で泣くじゃないか。

人形にはそんなプログラム組まれてないから、捨てられたらそのまま。ただスクラップにされるだけ。

私は鉄くずの中に転がっている無残な人形ドールに視線を移した。

「人形はロボットだよ」ドール

反応がないのでもう一度そう繰り返すと「まあ、そうですね」と、彼女はひどく穏やかな声で肯定した。

予想外の声色に彼女を見やる。そこにある彼女の表情にはなにもなかつた。どんな心も存在していないかのようで妙にゾッとした。

「でも、ロボットにも感情が生まれることがあるかもしれませんよ」

私の視線に気づいたのか、彼女はふっと表情をつくつて そう、私には、その時の彼女の笑顔は作り物のように見えた 言つた。

「中には、どうして自分が生まれたのか考えすぎて壊れてしまったロボットもいるかもしれません」

「なにそれ？」

「例えばの話です」

彼女は妙に威圧感のある笑みを貼り付けたまま、反論を待つようにチラリと私を見た。

私はジュースの缶を口に運んでから「……仮にそんなこと思つたロボットがいてもさあ、人間でも分かんない答えを誰が答えられるのさ」と、少し強めに言つた。

どうして自分が生まれてきたかなんて誰が答えられる？ 居もない神が答えてくれるとでも？

私の言葉に彼女は感心したような溜息を漏らした。

「それもそうですねえ。盲点でした」

さすがアサノさん、と彼女はあっさり納得して頷く。そこには、いつものほわんとした笑顔。なんだか肩透かしを食らつた気分だ。

「……やっぱりパルシアルって変」

残ったジュースを一気に飲み干すと、私はフェンスから飛び降りた。

そろそろ仕事を再開しないと、今日は収穫ゼロになつてしまつ。

「休憩はこれまでね」

彼女に断つて、私はスクランプの山に足を踏み入れる。

「また来ますね」

そういう彼女の声が聞こえて、私は片手をあげてそれに答えた。

少し離れたところに私が掘り起こした人形がある。

先程は気がつかなかつたけど、ガラス球の目は開けられたまま、空を見ているようだつた。私はその瞼に軽く手のひらを乗せて瞳を閉じさせる。

コウナが死んだら、あのバカっぽい看取り用のドールは同じことをするのかな？

ふとそんなことを思つて、馬鹿馬鹿しくなつた私は声を出せずに笑つた。

さつさと売れるものを探して、目がちかちかするどピンクの電飾看板がかけられたあのリサイクルショッピングへ行こう。

私の名前はリカ。リサイクルショップの雇われ店員。簡単に言つとバイトだ。

しかし、バイトのままで終わるつもりは、さらさらない。いずれはこの店を我が手中に収めてみせる。それだけじゃない。さらにはエリア拡大もはかるうと考えている。この店は私の手で世界のリサイクルショップになるのだ。

果てしない野望のための第一歩は店長の抹殺からだ。実際に抹殺するんじゃなくて社会的に? そんな感じにアバウトに。

「それでね……聞いてる? リカちゃん」

いつのまにか田の前に店長がいた。
この人、まだ話していたのか。

商品を陳列しに行く振りをしながら、少し離れる。

「聞いてますよ。つていうか、もっと簡潔に話してくれませんか?」

「簡潔に?」

「そう、まだオチまで言つてませんよね」

私が出勤したのが10時。現在は10時30分。

店長は、私が制服に着替えてから といつても、エプロンをつけるだけなんだけど ずっと話し続けている。その間、開店準備はまったくしていない。口だけ動かして手は動かさず。いつものことだから、と仕方なく開店準備を始めた次第だ。

とはいって、開店時間は11時だ。私たちに残された時間はあと30分しかない。

いくら私が開店準備の天才としても、いい加減店長にも動いてもらわないときびしいものがあった。

そろそろ店長の息の根を……もとい、口を止めよ。

私が止めなければ、店長は残りの30分も口だけを動かすだけだらうし、なによつこれ以上、彼女の長無駄話を聞き続けるのは精神衛生上悪い。

「なにが言いたいのか、そろそろはよつきて言ってください」「うん。だからね、うちの買い取り価格つてそんなに安いのかなあつて」

店長は眉毛を八の字にして言った。

もしも、私が男なら胸キュン物だつたかもしぬないが、生憎と私は超がつくほどの美少女だ。店長のそんなふりつ子仕草には飛び蹴りをくらわしたくなる。それに

「……それだけですか？」
「うん、それだけだよ。どう御つ?」

それだけのこと、どうして一言で済ますことができないのだろう。

おはよう、リカちゃん。ちょっと聞いてくれる? 大問題が勃発したの。それで相談に乗つてほしいんだけど……一から説明していくから、ちゃんと聞いてよ(略) そう、いつものジャンク漁りの女の子がぶうぶう文句言つてくるんだよね。その子さあ、私のことキショイとか言つじ。ちょっとひどいよね。それでね、リカちゃん云々云々。

まだ耳に残つてゐる愚痴と云々かなんと云々か。結局、この30

分間、ここはまったく関係ないことを話していたんじゃないかな。

「……あの、店長」

「なに?」

「そんなこと30秒もあれば楽に言えますよね」

「うん」

「あなた、30分も話してたんですよ」

「え、うそ? あれ、ヤダ、ホントだあ」

時計を見てキショイ声とくねくねした動き。
いまさら気づいたらしい。ムカムカ。

「つまり、29分30秒も時間無駄にしてますよね」

ムカムカ。

「関係ある話だから無駄じゃないでしょ」

店長はキヨトンと首を傾げる。

無駄です。あなたの言葉の全てが無駄なんです。あなたの口から紡がれる全ての音が無駄なんです。言い換えるならば、あなたのそんぞ わすがにそれは言いすぎだな。

私は言いたい言葉をぐつとこらえて 「……もういいです」と、会話の拒絶を示すように手を上げた。大人な対応つてやつだ。後世の店長たるもの、それぐらいできなければ、この街の人間相手に商売なんてできないのだ。

「それで、どう思つ?」

「なにがですか？」

「だから、買い取り価格の話」

もう、しつかりしてよね、と店長は頬を膨らませる。その頬を両の手差し指でぶしゃっと凹ませたいものだ。

「さあ？」

「さあつてリカちゃんも少しばかれてよ」

「だつて、私はそんなこと言われたことありませんから」

「そうなの？」

「ええ」

「そうなんだあ。なんでだろ？ なんで私の時だけ文句が出るのかなあ？」

店長は少し考えるように口元に手をやつた。

事実だつた。店長の話にでてきたジャンク漁りの子の応対を何度かしたことあるが、私の出した買い取り値にケチがついたことはない。

とどのつまり、店長はその子に舐められているだけなのだつ。どう見ても舐められそうなキャラと声だし。私はチラリと店長を見る。

彼女は、私の視線に気づいたのか、「じゃあこのままで大丈夫だね」と笑つた。そして、こう続ける。

「さ、無駄話は終わりにして開店準備するよ」

さつきから私はしている。

思わず、陳列したばかりの電子レンジを彼女に向かつて投げつけたい衝動にかられた。そんなことはしないけれど。

店長如き取るに足らない人物のために私の輝かしい未来を棒に振

るつもりはない。」この店が手に入るまではおとなしくしてあげよ。

まあ 気を取り直して開店準備。開店準備……はて、これはなんだ？

つい手に取つてしまつたのは陳列待ちの商品の中にある物体。

「て、店長、これって売り物なんですか？」

「んー？ あつ！ それウインドウに飾つたらいいと思わない？」

「……え？ これですか？」

「絶対にいいと思つて昨日、買いつけてきたの」

店長は自信満々に言つ。私は、自分の手元にあるものを改めて見直した。

どじめ色の奇妙奇天烈な、というか、かなりグロテスクな感じのする置物。こんなものを店の鏡ともいわれる重要なポジションに置いて客が減らないだろ？ いや、減る。考えるまでもなく、絶対に減る。

店長の案は、審議の結果、棄却されました。彼女にばれないように、私はその置物を棚の下に無理やり押し込んで、一度と人目に触れられないようにした。

これでよし、と私が勝利のステップを踏んでいると入り口の自動ドアが開く音がした。

見ると、今時ちょっと見られないよつなおかつぱ頭の女の子が立つていた。

「すみません、まだ開店時間じゃないんですけど」

店長がすかすかその子に声をかける。

店長が対応するなら私は行かなくてもいいだらう。一人の話に聞き耳を立てながらも、私は開店準備を続ける。

「あ、いえ……あの買い物に来たわけじゃなくて」「はい？」

「私、人を探してるんです。この人なんですけど、知りませんか？」

ポウツと立体写真の映像が出る音がした。

「……あ

なにかに気づいたような店長の声。

「知ってるんですか？」

「知ってるっていうか……ねえ、リカちゃん」

店長が私を呼ぶ。

私がいないとあの人はなにもできないらしい。全くもって困った
ちゃんだ。

商品を並べる手を止めて一人のいるほうへ向かう。

「なんですか？」

「ほら、この子」

店長は手にした立体写真を私に向ける。

「ああ」

差し出された写真に映っていたのは、よくこの店に来る壊し屋さ

んに最近くつこで行動してくる少女の顔と同じものだった。

「知ってるんですか?」

「知つてますよ。この方がどうかしたんですか?」

事件の匂い。そんなわけない。

「あの、これを彼女に渡してほしいんです」

女の子はガサガサと音を立てて、ウェストバッグから一枚のディスクを取り出した。

「はー?」

「お願いします」

女の子が頭を下げる。

「構いませんよ」

「ダメです!」

店長と私の声が重なった。

「ふえ?」

女の子は私と店長を交互に見比べる。店長は驚いた視線を私に投げかけている。

「ちょっと力ちゃん、どうしてそつ意地悪な」と言つの? ディスク渡すぐらいいいじゃない

「ダメですね」

私は店長に向かってきつぱっと囁いてから、女子に向かって直る。

「私たちには慈善事業やってるわけじゃないんですよ。ただでそんなことさせません」

セツペイジと指を立ててみせると、ぽかんと口を開けていた女子は私の言葉を理解したのか「じゃ、じゃあ……これ、ください」と、すぐ近くの棚から田代覚まし時計を持ってきた。

「毎度あつい……」

私は彼女からイヤスクとお金を受け取った。店長が信じられないといったような顔でこちらを見ていたが気にしない。商売とはこうやるものだ。

「それじゃあ、よろしくお願ひします」

女子は、ペコリと頭を下げると店を出て行った。その姿を見送っていると、後ろから妙な視線を感じる。振り返ると店長と田代が合った。

「……リカちゃんって顔に似合わず、がめつこよね」

呆れた声で囁く。

「がめつにわけじやないですよ。」これは商売の基本です。店長が甘すきるんです」

私は受け取ったメモリを胸ポケットにしまってながらそう返す。

「やうかなあ

店長は、首を捻った。

「やうですか

少しの沈黙。店長が気を取り直したかのように「……でも、なんだらうね、その『ティスク』と言つた。

「さあ、なんでしょうね

「見ちやおつか」

好奇心丸出しの声。囁ひと思つた。

「ダメですーーー！」

「え、なんですよ？」

「私は、お客様との信頼関係を大事にしますからね。そういう信頼を裏切る行為はしません」

「ケチ」

ふてくされた子供のように店長が口を尖らせる。

あなたは何歳ですかああああーーーと、耳元で叫びたくなった。

「ともかく、これは私が保管しておきますからね」

「はいはー」

店長は諦めたように肩をすくめた。

時刻は10時50分。

「そろそろ開店ですね！ 店長、わざわざアリの『ハリ』掃いてくれ
ださい」

「……私、店長なんだけどなあ」

ぶつぶつ文句を言しながらも、店長は渋々モップを手にした。

「私は外の電飾つけますから」

危うくのつとり作戦がばれそうになつたので私は外に避難した。
店の電飾看板。R & a m p ; R という文字が輝いている。しかし、
まだ以前の名残で、そのライトは店長好みのピンクのまま。
この色、神経がじうかしてるとしか思えない。近い「つか」こんな
目に悪い色は変えよう。

自分の考えに、うんうんと頷いていると

「ちょっとリカちゃん！！」

店内から私を呼ぶキンキン声。

やれやれホントにいい年して困つたちやんだ。私は大きく伸びを
して入り口のドアをぐぐつた。

そこには、私が棚に捻じ込んだはずのグロテスクな物体を持ち、
物凄い形相で立っている店長がいた。

「リカちゃん、説明、してくれるよね？」

額に筋をいくつもたてながら店長がにっこりと笑う。ぞくぞくつと背筋に悪寒が走った。

私はこの店の店長になる前に天国に行くかもしれない。本気でそんな気がした。

「……大丈夫かなあ？」

今しがた出てきたリサイクルショップの方から、ガラスの割れる音が聞こえて、カナエは不安げに呟いた。

やはり、他人に頼まないで直接渡すべきだったろうか？

いや カナエは微かに首を振り、バッグにしまった立体写真を取り出す。

直接会わぬで渡してほしいというのが彼女の頼みだった。だから、これでいいのだろう。

私が彼女を拾ったのは、この街で何年か振りの台風が襲来した翌日のことだった。

アパートの共同カーポートに置いておいたスクーターがずつと気になっていた私は そのスクーターは誰が見ても旧式のタイプで、大した価値はないのだけれど、私にとっては、はじめてのお給料で買った大切なものだ まだ誰一人として起きていないだろう早朝に外に出た。

外に出ると、まだ台風の残した雲が弱い雨を降らせていた。濡れるのも構わず小走りで階段を駆け下りる。

「……うわ

下りてすぐに見える共同倉庫の惨状に思わず声が出た。風で右へ左へ転がされたのだろう、使い物にならないくらいボコボコだ。見ていると不安が募つてくる。

カーポートは大丈夫だろうか？

私は逸る気持ちを押さえながら、アパートの裏側にあるカーポートに向かつた。

すぐに目に入つてくるのは倒れた自転車たち。そして、大きなワゴン車。私のスクーターはその影に置いてある。せめて風よけになればと思って台風が来る前に移動させておいたのだ。

自転車みたいに倒れているだけならいいけど そう願いながら恐る恐る覗きこんでみる。

奇跡が起きていた。私のおんぼろスクーターは、まるでなにかともなかつたように立つていたのだ。台風が来る前とまったく同じ状態。

よかつた。ホッとしながらスクーターに駆け寄りつとして

「あつー。」

私はあるものに気がついた。

人だ。私のスクーターのすぐ傍らに人が倒れている。しかも、ピクリとも動かない。

もしかして、死んでいるのかも知れない。

「ど、どうしよ……」

キヨロキヨロと辺りを見回す。

私が殺したわけじゃないんだから、人目を気にする必要はないんだけど。その前に、死んでるかどうかも分からなってば。落ち着け、私。

深呼吸。なんとなく抜き足差し足の要領で近づく。

しゃがみこんで顔を確認する。女の子だ。髪は乱れていて顔にたくさん泥がついている。だけど、とても綺麗な子だった。

「……あのお？」

声をかけてみると、すぐにその子は目を開けた。大きな瞳がじつと私を見つめてくる。

「……う、動けますか？」

問うと彼女は小さく首を振った。

なんてこいつたい！　どこのか怪我でもしているのかもしれない。

私は慎重に彼女の体に腕を回して抱き起こす。

「大丈……つて血いつ！？」

うつ伏せになっていたから気がつかなかつたけれど、よく見ると彼女の体にはかなりの量の血がこびりついていた。

なんだか物凄くヤバい人なのかもしれない。

「い、一体なにがあつたんですか？」

「……」

彼女は無言で首を振る。

「誰にこんなこと?」

「……」

彼女は無言で首を振る。

「どうしてこんなところで?」

「……」

「家はどこなんですか?」

「……」

矢継ぎ早の私の質問に彼女は全て首を振る形で答える。このままじや埒が明かない。

「……警察呼んだほうがいいのかな」

思わずそう呟いてしまった。

途端、彼女が激しく首を振り、私の腕から逃げるようにふらふらと立ち上がる。どう見ても行く宛があるようでは思えない。

「ちよ、ちよっと待つてよ

私が彼女を呼び止めるのと、彼女が倒れこむのはほとんど同時に倒れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6813x/>

carvaly

2011年11月30日20時08分発行